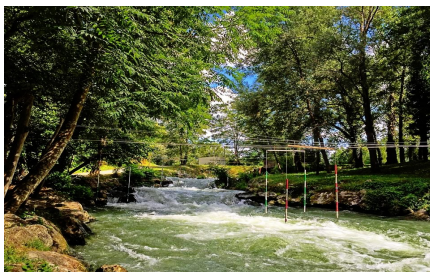


フランスの魚道を用いたカヌースラローム 人エコース例

フランスには 120 程のカヌースラローム用に整備されたコースがある。
2017 年に世界選手権が開かれるコースのみ、ポンプでの汲み上げ式を用いた完全人工コース(スタジアム型)で残りは日本国内でも見受けられる河川のある一定の区間をそのまま利用した半人工コースと、ダムや堰の隣に設けた魚道を用いた完全な人工コース(流しっぱなし型)である。

例 1 : Orthez (オルテス)

ピレネー山脈麓の西側に位置するこのコースは、
下の航空写真のように堰の横にバイパスで魚道を引き、
コース最上部に水門を設置し、そこからコース内に取り水している。



取水口



出展 : <http://www.eauxvives.org/fr/slalom/voir/orthez>

上記サイトにはダムの放流をこの水路に集中することで、少ない水量で落差のあるコースが出来、年間を通して安定した水量が保てるという記述がある。

また上記の 2017 年世界選手権の会場から車で 40 分ほどの立地で、無料で日没まで練習出来るため、このコースからリオ五輪出場選手を輩出するなど、大会時のみならず、普段からもサブコースとして大きな役割を果たしている。

例 2 : Tours (トウール)

パリから南西に 250 km ほどに位置するこのコースは大きな河川の堰の隣にある既存の公園内に 3 面護岸の魚道を設け、その魚道をカヌースラロームやリバーサーフィンなどのウォーターアクティビティが出来るように整備している。



カヌースラローム用に整備したことで、本来の魚道の役割のみならず、水と触れ合うことができるという付加価値のついた市民の憩いの場となっている。
(コースディレクター Paul-emile Vernadet 談)



例 3 : Lannion(ラニオン)

このコースはフランス北西部のイギリス海峡に流れこむレゲ川の河口に整備されたコース。上記の2つの例と異なる点は、バイパスの魚道ではなく、堰に数個ある水門のうちの1つを利用した魚道作り、それをカヌースラローム用に整備している。



フランスでは、完全な人工コースは水と触れ合う際の危機管理がし易いため、積極的に学校教育に用いられ、また都市部にコースを整備することで、大会時の集客のみならず、普段から市民に水に親しむ機会を与えることが出来、それによってまた競技人口の拡大、強豪選手の重要な拠点にもなっている。

フランス / 国土面積は日本の 1.5 倍・人口は日本の約半分

レジャーカヌー人口約 100 万人 競技カヌー人口 10 万人 常設コース数 120

日本のレジャーカヌー人口約 10 万人 競技カヌー人口 1 万人 常設コース数 0

レポート 2016.6.1

小田弘美(カヌースラローム競技 元日本代表)